

末摘花

(前略：現代語訳中)

見ないようにして、外の方を御覧になつていらつしやります
が、横目で見るその姿は尋常ではありません。「どんなお姿で
あろうか、打ち解けていつて、少しでも良い点が見つけれられ
ば、それはそれでうれしいかもしれない…」と、お思になる
のも、無理があるような、そんなお気持ちではないでしょうか。

まず第一に、座高が高くて、胴長にお見えなので、「思った
通りだ…」と、失望なさります。引き続いて、ああこれはひど
いと見えるのは、鼻でありました。つい目がとまってしまふの
です。普賢菩薩の乗物のようです。この世のものとは思われな
いほど高く長くて、先の方がすこし垂れ下がって色づいている
こと、ことのほか難があります。顔色は、雪も恥じるほど白く
まつ青で、額がとてもふくれている上に、加えて下ぶくれの顔
つきは、全体として仰々しい程の面長なのでしよう。お痩せに

なっていることと叫びたら、気の毒なくらい骨ばって、肩のあたりなどは、痛々しいほどに着物の上まで透けて見えています。

源氏は「どうして残りなくすっきり見てしまったのだろう」と思う一方で、あまりにすごい容貌をしているので、やはりついつい目を奪われておしまいになるのです。

頭の様子、髪のかかり具合も、かわいらしく素晴らしいと思いを申ししていた人々にも、少しも劣っているわけではなく、桂の裾にたまって引かれているのを見ると、一尺ほど余っているように見えます。着ていらつしやる物まで言い立てるのも、口が悪いようですが、昔物語でも、人のお召し物についてまずは述べているようです。

紅色のひどく表面が色あせた一襲に、すっかり黒ずんだ桂を重ねて、上着には黒貂の皮衣、とても気品があり香を焚きしめたのお召しになっています。昔風の由緒ある御装束ですが、やはり若い女性の装いとしては、似つかわしくなく仰々しいところが、本当に目に付きます。しかし、なるほど、この皮衣がなくては、さぞ寒いことだろうと思われるお顔色なのを、源氏は

お気の毒なこととご覧になります。

何もおっしやれず、自分までもが口が利けなくなつたような気持ちになさるのですが、いつもの沈黙を破ろうと、あれこれと話しかけ申し上げなさります。しかし、ひどく恥じらつて、口を覆つていらつしやる姿までが、田舎じみて古くさく、大げさで、儀式官が練り歩く時の臂つきに似ているのですが、そうは言つてもやはり、少し微笑んでいらつしやる表情は、中途半端でそわそわした感じでした。源氏はお気の毒でかわいそうなので、ますます急いでお出になろうとするのでした。

源氏は、

「頼りになる人がいないご様子ですが、契りを結んだ私には、心を隔てず打ち解けて下さいましたら、本望な気がしますのに。気を許すことがなさそうなご表情なので、辛くて…」

などと、姫君のせいにして、

「朝日がさしている軒のつららは解けましたのに

なぜあなたの心のつららは固まつたままなのでしょうか」

とおっしやるのですが、姫君はただ、

「むむ」

とちよつと笑うだけで、とても口が重い様子であるのもお気の毒で、いたたまれずお出になつてしまいました。

(後略…現代語訳中)